

文化が連れてくる
出会いと感動を
心から楽しむこと

今秋、開幕する『第30回国民文化祭』。新福憲一さんは、総合フェスティバル（開・閉会式）の総合監修をはじめ、マーチングバンド・バトントワーリングの祭典でも企画委員長として忙しい日々を送っている。マーチングバンドの指導者として、さまざまな式典の演出家として、多様な文化に触れてきた経験から生み出されるステージは楽しみのひとつ。国文祭での演出や、鹿児島県の音楽文化などについて話を伺った。

第30回国民文化祭県実行委員会 企画委員会
総合フェスティバル部会 部会長
鹿児島県マーチングバンド連盟 理事長

新福 憲一さん

Kenichi Shinpuku

マーチングバンドに携わる きつかけは何でしたか？

鹿児島県警の警察音楽隊に所属してマーチングバンド指導者の資格を取得したのがきつかけです。昭和57年に鹿児島で開催された高校総体式典参加団体で演奏する高校3校と小学校1校の指導を行ったのを皮切りに、県内各地域で指導を続けています。その中で常々感じているのは、「人を動かす」ことで、もたらされる感動。

印象深いのは子どもたちの指導です。昭和天皇ご臨席の全国植樹祭(昭和59年)に向けて指導した、旧牧園町立高千穂小学校の子どもたちは、ほぼ未経験の4年生。個性も能力もバラバラでしたが、3年かけて、演奏技術だけでなく、他者を思いやる心や保護者や学校の姿勢など、少しずつ変化して



現在もマーチングバンドの指導を続けている新福さん。

いく過程を目の当たりにしました。

また、奄美群島日本復帰50周年記念県民体育大会(平成15年)で、名瀬小学校を指導した際にも感動がありました。本番前の最後の練習を終えて飛行機に乗る際、学校で挨拶しそこねた児童が先生や保護者ともなつて空港まで見送りに来てくれ、私に向けて演奏してくれたのです。涙しながら聴いたあの「島育ち」という曲は、今でも私の心に残る感動の一曲です。こんな風に子どもたち、先生、学校、保護者、地域とともに一つの目標に向かうとき、人を動かすことの深さや出会いの大切さを実感します。

30年以上、指導や演出で

活躍されている原動力は？

中学では吹奏楽部。3年生でキャプテンだった当時、先生やメンバーと参加した西部吹奏楽連盟主催の講習会が、私と音楽を強くむすびつけました。日本トップクラスのバンド演奏を聴いて、大いに刺激を受けた講習会は宮崎で催されたため、移動は列車。帰りの車内で先生がふと、「習ったことを復習してみようか」と。最後尾の車両に私たちだけということもあり、楽器を出してみんなで演奏を始めたんです。すると音がどんどん熱を帯びてきて…。

私は指揮をしていくうちに気付かな

かったのですが、いつの間にか他の車両から乗客が集まってきたりしてはありませんか(笑)。演奏後の拍手、聴いてくれた乗客の方々が駅で降りることに「ありがとう、頑張ってたね」と私たちに手を振る姿。その時の喜びと情景が、今日までの活動の礎となっています。

開会式典などの演出を担う

立場として、意気込みを

教えてください

鹿児島県は南北600kmにわたり、広大な県土を有しています。そこにある多様な自然や文化、歴史をこの身体感してきました。自身の経験と感動をもとに、今回のテーマである「文化維新は黒潮に乗って」とリンクさせ、メイン会場とサテライト会場に一体感を持たせた演出を行う予定です。

鹿児島で生まれた歴史や文化、豊かな自然を若者たちの演奏・演技で表現できるように、皆で邁進中です。

地域を元気にするための

文化振興について、

考えを聞かせてください

セレモニーなどの企画や演出の担当も多く、伝統芸能をアレンジする機会もしばしば。演出は時間の制約がつきもので、こちらの都合で大幅に短縮す

ることもあります。伝統的な演舞や演奏では、受け継いできた人たちの憤りをぶつけられることも。もちろん、もつともな意見です。本物や本質を知るからこそ、心苦しさを感じながらの演出も少なくありません。

一方で、民俗芸能にスポットを当てると地域が活気づくことも体験しました。練習が始まってまず訪ねてくるのは古老の皆さんで、見学や会話を通じて演者とのつながりができます。人々の関わりが変わると、地域もよい方向へ変わります。今回の国民文化祭をきっかけにできた創作舞踊もあり、これから長く伝えられる文化となる期待感も生まれました。伝統や文化に新しい息吹を入れ、発展性を持たせていくのも重要だと考えています。

今秋、全国から素晴らしい文化が鹿児島に集結します。触れたことのない文化を楽しみ、学び、吸収する好機です。そしてぜひ、出会いの素晴らしさを実感してください。

